

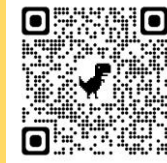
令和8年度病害虫発生予察情報 発生予報第6号(7月)

令和8年7月29日

発表：福島県病害虫防除所

【注意が必要な病害虫】

普通 作物	■ 水稻：斑点米カメムシ類 -① (令和8年7月13日付け注意報参考)
果樹	■ ナシ：黒星病 -②
野菜 花き	■ 秋冬ねぎ：べと病 -① (令和8年7月8日付け防除情報参考) ■ 夏秋ナス：灰色かび病 -③ ■ 野菜花き共通：カメムシ類、カスミカメムシ類 -③



病害虫防除所
HPは
←こちらから



病害虫に関する
防除対策の
ページは
←こちらから

※ 上記の表に記載された病害虫は、下記の①～③に該当します。

注) ①現状において、注意報レベルの防除を要すると判断された病害虫

②「1 主な病害虫の発生予報」のうち、予察調査の結果、発生時期が「やや早い」、発生量が「やや多い」と予測された病害虫の中で特に懸念される病害虫

③「1 主な病害虫の発生予報」以外で調査の結果、今後、県全域的に発生が多く問題になると判断した病害虫

1 主な病害虫の発生予報

(1) 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生 時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	全 域	—	平年並	7月中下旬の新梢葉での発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	天候に注意しながら、散布間隔があきすぎないように薬剤散布を実施する。
	褐斑病	全 域	—	平年並	7月中下旬の新梢葉での発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	現在、本病の二次感染期であるので、感染拡大を抑制するため天候に注意しながら、散布間隔があきすぎないように薬剤散布を実施する。
	黒星病	全 域	—	平年並	7月中下旬の新梢葉での発生は確認されず、発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	発病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。 天候に注意しながら、散布間隔があきすぎないように薬剤散布を実施する。
	キンモンホソガ	全 域	—	平年並	7月中下旬の新梢葉での発生ほ場割合は、平年より高かったが、いずれのほ場においても少発生であった(±)。	農作物病害虫防除指針や地域の防除暦に従って防除を実施する。

作物名	病虫害名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	ハダニ類	全 域	－	やや少	7月中下旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年よりやや低かった（－）。	園内の発生状況を確認し、要防除水準（1葉当たり雌成虫1頭以上）に達した場合は、殺ダニ剤を散布する。
モモ	灰星病	県 北	－	平年並	7月中下旬の果実での発生は確認されず、発生ほ場割合は平年並であった（±）。	収穫期の20日前頃から果実感染がしやすくなるため、特に不順天候時は散布間隔があきすぎないように薬剤散布を実施する。
	せん孔細菌病	県 北	－	やや少	7月の新梢葉及び果実での発生は確認されず、発生ほ場割合は平年よりやや低かった（－）。	発病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。
	モモハモグリガ	県 北	－	やや少	7月中下旬の新梢葉での発生は確認されず、発生ほ場割合は平年よりやや低かった（－）。	発生が多いほ場では、収穫後であっても薬剤散布を実施する。
	ハダニ類	県 北	－	平年並	7月中下旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並であった（±）。	園内の発生状況を確認し、要防除水準（1葉当たり雌成虫1頭以上）に達した場合は、殺ダニ剤を散布する。
ナシ	黒星病	県 北 県中・県南、浜通り	－ －	平年並 やや多	県北地方では7月中下旬の果実での発生ほ場割合は平年並であった。 県中・県南、浜通り地方では果実での発生ほ場割合は平年よりやや高かった（＋）。 新梢葉での発生ほ場割合は、全域で平年並であった（±）。	発病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。 薬剤散布の際は収穫前日数に十分に注意する。
	ハダニ類	全 域	－	平年並	7月中下旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	園内の発生状況を確認し、要防除水準（1葉当たり雌成虫1頭以上）に達した場合は、殺ダニ剤を散布する。
果樹共通	カメムシ類	全 域	－	平年並	リンゴ、モモ、ナシにおける7月中下旬の果実被害の発生ほ場割合は平年並であった（±）。	園内をこまめに見回り、成虫の飛来状況をよく確認する。成虫が次々に飛来し被害が懸念される場合には速やかに薬剤防除を実施する。

注）予報の根拠の中で（＋）は多発要因、（－）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

(2) 野菜、花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト(被覆栽培)	灰色かび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であったが、一部では発病度の高いほ場が確認されているため、注意が必要である(±)。	発病葉や罹病果は速やかに処分し、防除を徹底する。 多湿条件で発生が多くなるので換気を十分に行う。
	葉かび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	多湿条件で発生が多くなるので換気を十分に行う。
	すすかび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	密植、過繁茂、換気不足の場合に発生しやすいので、換気を十分に行う。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	コナジラミ類	全 域	—	やや少	発生ほ場割合は、平年よりやや低かった(－)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	アザミウマ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	アザミウマ類の寄生や、被害果(白ぶくれ果)をよく観察し、発生初期から防除を徹底する。
	ハモグリバエ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。
夏秋キュウリ(露地栽培)	べと病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、発生初期から防除を実施する。
	うどんこ病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。
	炭疽病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。 排水対策の徹底、過湿防止、資材の消毒に努める。
	褐斑病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。 被害茎葉残さは必ずほ場外に持ち出して処分する。また、資材の消毒に努める。

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏 秋 キュウリ (露地栽培)	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、すみやかに防除を実施する。 ウイルス感染株が発生している場合は、速やかに抜き取る。
	ハダニ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)が、一部で寄生葉率の高いほ場が確認されている。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。 薬剤抵抗性の発達が懸念されるため、異なる系統のローテーション散布を実施する。
キク(露地栽培)	白さび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)が、一部で発病葉率の高いほ場が確認されている。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。 品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年よりやや低かった(－)が、天候予報(仙台管区气象台7月23日発表)によると、向こう1ヶ月の平均気温は高いと予想されている(+)。	気温が高くなると、急激に発生量が増えるため、低密度時から防除を実施する。 抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
	アザミウマ類	全 域	—	やや多	発生ほ場割合は、平年並であった(±)が、天候予報(仙台管区气象台7月23日発表)によると、向こう1ヶ月の平均気温は高いと予想されている(+)。	ほ場をよく観察し、葉裏まで薬剤がかかるように防除を徹底する。
リンドウ	葉枯病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)が、一部ほ場では、中位葉以上での発生が確認されているため注意が必要である。	多湿条件で発生が多くなるので、予防散布に努める。
	褐斑病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	病徴を確認してからの薬剤防除では効果が期待出来ないため、発病前からの予防散布に努める。

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンドウ	ハダニ類	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年よりやや低かった（－）が、天候予報（仙台管区気象台 7 月 23 日発表）によると、向こう 1 ヶ月の平均気温は高いと予想されている（＋）。	気温が高くなると、急激に発生量が増えるため、ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
	リンドウ ホソハマキ	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は速やかに防除を実施する。
野菜・花き共通	タバコガ類	全 域	－	やや多	発生ほ場割合は、平年よりやや高く（＋）、キクやリンドウ、トマトでの発生が確認されている。	被害が予想される作物では生長点付近、トマト、ピーマン、ナス等の果菜類では果実等をよく観察し、寄生や被害が見られた場合は、速やかに防除を行う。

注）予報の根拠の中で（＋）は多発要因、（－）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

2 発生が懸念される病害虫

リンゴ・モモ・ナシ等	■ ナシヒメシンクイ モモでの 7 月上旬の新梢被害調査において、発生ほ場割合は平年並であった。ナシヒメシンクイ第 3 世代成虫の誘殺盛期は、気温が 2℃ 高く推移した場合、8 月 2 半旬頃と予測され、第 4 世代の防除適期は 8 月 3 半旬頃と推定されます（農業総合センター果樹研究所（福島市）、7 月 23 日現在）。 本種は主にモモなどの核果類の新梢伸長が停止するとナシ果実への寄生が増加します。例年、ナシでの果実被害が多い地域では、近隣のモモなどにおける防除も徹底しましょう。なお、薬剤による防除を実施する場合には、使用基準を遵守しましょう。 ■ カイガラムシ類 リンゴでの果実調査において、ナシマルカイガラムシによる被害が見られています。ナシマルカイガラムシ第 2 世代ふ化開始は、今後の気温が 2℃ 高く推移した場合、7 月 6 半旬頃と予想され、ふ化盛期は 8 月 1 半旬頃と推定されます（農業総合センター果樹研究所（福島市）、7 月 23 日現在）。 カイガラムシ類はふ化期の防除が重要であるため、防除適期を逃さないように防除を徹底してください。
夏 秋 トマト（被覆栽培）	■ トマトキバガ 県南地域に設置したフェロモントラップでは、6 月下旬から 7 月上旬にかけて約 150 頭程度の誘殺増加が確認されており、県内の夏秋栽培ほ場の複数地点で、幼虫による葉の被害が確認されているため今後の発生に注意が必要です。 ほ場をよく観察し、被害の早期発見・防除に努めましょう。また、被害葉や被害果実は摘み取ってビニール袋等に入れて蒸し込みし、完全に死滅させてください。
夏 秋 ナス	■ 灰色かび病 7 月上旬に実施した夏秋ナスの巡回調査において、灰色かび病の発生ほ場割合が平年より高い状況でした。多湿時に発病しやすくなるため、ほ場をよく観察して低密度時から防除を実施しましょう。また、罹病果は速やかに除去し、適切に処分しましょう。
野 菜 花き共通	■ カメムシ類、カスミカメムシ類 7 月中下旬に実施した夏秋露地きゅうりの巡回調査では、11 ほ場中 8 ほ場でカメムシ類、カスミカメムシ類の寄生が確認されています。また、11 ほ場中 3 ほ場ではカメムシ類によると考えられる果実の被害が発生しています。また、キク等の生長点への寄生も確認されています。 今後、高温条件で、さらに発生量が増加する可能性がありますので、ほ場をよく観察し、発生時の薬剤防除を徹底しましょう。